

「行きて帰りし物語」絵本の研究 (1)

—「円環型」のお話の分析—

山下 紗織*

A Study on Picture Books of “There and Back Again” (1):

An Analysis of Stories with “Circular Type”

Saori YAMASHITA

Abstract

First I show in this paper that picture books of “There and Back Again” are classified into some patterns. Next the reason why children like “There and Back Again” stories is discussed. In doing so, I introduce the concept “Circular Type.” In the “Circular Type” stories, the characters go in only one direction as contrasted with other types of “There and Back Again” ones. We can always find repetitions and rhythmical phrases in them. And they are well organized as “introduction-development-turn-conclusion.” All characters have no end or aim, and do nothing but go forward, having no definite turning point. These features are quite similar to children’s play. In the earliest years children repeat the same actions without purpose. “Circular Type” stories correspond with children’s physicality, that is, the senses of the body.

Keywords: There and Back Again, picture books, circular type, play, physicality

1 問題と目的

児童文学作家・翻訳家の瀬田貞二は、子どもが喜ぶお話には構造上のパターンがあることを指摘し、それを「行って帰る」という言葉で表す¹。なぜ子どもは「行きて帰りし物語」を好むのか／子どもにとって「行きて帰りし物語」はどのような意味をもつのか—これが、本研究の根底にある問題関心である。

瀬田（1980）は、マージョリー・フラックの『アンガスとあひる』をはじめとする一連の作品や複数の昔話など、子どもに好まれるお話には「行きて帰りし物語」が多いと述べ、日常的に遊び等で「行って帰る」運動をくり返している子どもにとって「行きて帰りし物語」は身体的にもなじみやすく、そのために好まれるのではないかと仮説を立てる。さらに「行きて帰りし物語」にはいくつかの類型があると指摘する（瀬田 1980: 23-28）。あるところまで行ってお話の向きが変わり逆順序に一段ずつ戻っていく話（「おばあさんとぶた」系）、あるところまで行って帰ってきて何もなくなってしまう話（「ヘドレーのベゴコ」

キーワード：行きて帰りし物語、絵本、円環型、遊び、身体性

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

系）、どんどん食べていって最後に食べたものがみんな出てくる話（「大食いのねこ」系）、手袋がいろいろあった後に元の持ち主に戻る話（ウクライナ民話『てぶくろ』の話）等が挙げられている。

このように「行きて帰りし物語」の類型に言及する先行研究がある。藤本（2015）は、出発-帰還（三段構造）型、出発-帰還（二元的構造）型、来訪-退去（別れ）型、来訪-退去（再会）型の4つに分類し、それぞれ昔話絵本を例に論じる。生駒（2008）は、（1）距離的な移動としての行きて帰りし（2）想像世界体験としての行きて帰りし（3）アイデンティティ形成の体験としての行きて帰りしの3つに分類する²。これらの先行研究は、登場人物がどこか特定の場所に「行き」その場所から「帰る」という型について論じており、瀬田（1980）が挙げる「大食いのねこ」系や『てぶくろ』系の話については触れていない。

さらに「行きて帰りし物語」のもつ意味を論じる先行研究もある。斎藤（2006）は数冊の絵本や童話、昔話等を取りあげ、「「行きて帰りし物語」の主題には、いつも「私探し」という要素が隠されている」（斎藤 2006:238）と述べる。川越（2007）は『かいじゅうたちのいるところ』を題材に、主人公のマックスが行く怪獣の島とごっこ遊びにおける秘密基地の共通点を挙げ、非日常空間を生きて秘密を抱くことは「精神的成長」（川越 2007:51）に意味をもつと論じる。前掲の生駒（2008）は『かいじゅうたちのいるところ』と『めっきらもっきらどおんどん』の比較分析を行い、「行きて帰りし物語」を「子どもの自己感確立」の物語として読み解く。また大塚（2008）は、『アングスとあひる』や宮崎駿アニメ、通過儀礼等に触れながら、「行きて帰りし物語」は「人が子供から大人になる、何らかの「成長」のためにどこか違う場所に「行って帰る」プロセスとしてある」（大塚 2008:38）と述べる。さらに宮本（2013）は大塚（2008）を踏まえつつ30冊の回想場面を含む物語絵本を分析し、現在から過去に時空的に行って帰ることで「登場人物の精神的なマイナス（欠如）がプラス（解消）になる」（宮本 2013:20）と論じる。

上記のように「行きて帰りし物語」に関する先行研究は少なく、いずれも代表的な作品数冊を取りあげてに留まっている。そこで本研究ではより多くの作品を分析対象として「行きて帰りし物語」の類型化を試み、その特徴を明らかにする。さらにその分析を通して、「私探し」や「（精神的）成長」「子どもの自己感確立」「欠如の解消」として（のみ）捉えきれない「行きて帰りし物語」のもつ意味を提示したい。

2 方法と対象

瀬田は「行きて帰りし物語」について論じる際に「幼い、いちばん年下の子どもたちが喜ぶお話」（瀬田 1980:6）と述べている。小さい（未就学の）子どもたちが目／耳にする「お話」の媒体で最も多いのは絵本だと考えられるため、本研究では分析対象を絵本に絞る。

選定方法については、以下の2点に留意した。ひとつは恣意的な選定を避けることである。本研究では既存の絵本リストから「行きて帰りし物語」絵本を選定することとした。既存の絵本リストは、株式会社トーハン（2015）の『ミリオンぶっく 2015 年版』（以下、「ミリオンぶっく」）と、古相ら（2006）による「お薦め絵本データベース」（以下、「お薦め絵本」）を用いた。「ミリオンぶっく」には、日本で累計100万部以上発行された絵本104冊がリストアップされている³。「お薦め絵本」には、78冊の絵本選書目録のうち、10書籍以上にお薦めとして採りあげられている絵本190冊がリストアップされている⁴。いずれも多くの子どもが目／耳にする可能性が高い絵本と考えられるため、対象とした。この2つのリストのうち重複する絵本が52冊あったため、選定対象となる絵本は延べ242冊であった。

留意点のもうひとつは「行きて帰りし物語」の定義を明確にすることである。瀬田や先行研究はどのような作品を「行きて帰りし物語」と呼ぶか明示していない。本研究では論理的に定義づけを行った。すなわち、物語には①行って帰る物語（「行きて帰りし物語」）②行ったまま帰らない物語③帰るだけの物語④行きも帰りもしない物語の4パターンがある。一度でも誰か／何かが行って帰る場合、「行きて帰りし物語」であることとする。また瀬田が「大食いのねこ」系や『てぶくろ』のお話を「行きて帰りし物語」に含めていることに鑑み、誰か／何か最終的に最初の状態に戻るお話も「行きて帰りし物語」とみなす。

以上2点を考慮に入れた結果、111冊が「行きて帰りし物語」絵本に該当した⁵。表1に示す⁶。

表1 「行きて帰りし物語」絵本

	書名	詞	絵	訳	出版年	出版社
1	あおくとときいろちゃん	レオ・レオーニ	レオ・レオーニ	藤田圭雄	1959=1967	至光社
2	赤ずきん	グリム童話	バーナディット・ワッツ	生野幸吉	1968=1978	岩波書店
3	あかんべノンタン	キヨノサチコ	キヨノサチコ		1976	信成社
4	雨、あめ		ビーター・スピア		1982=1984	評論社
5	アンガスとあひる	アーヴィン・フラック	アーヴィン・フラック	瀬田貞二	1930=1974	福音館書店
6	アンディとらいおん	ジェームズ・ドーハーティ	ジェームズ・ドーハーティ	むらおかほなこ	1938=1961	福音館書店
7	アンパンマンのサンタクロース	やなせたかし	やなせたかし		1981	福音館書店
8	いたずらきかんしやちゅうちゅう	バーニニア・リー・パートン	バーニニア・リー・パートン	村岡花子	1937=1961	福音館書店
9	いっすんぼうし	石井樵子	秋野本矩		1965	福音館書店
10	いやいやえん	中川李枝子	大村百合子		1962	福音館書店
11	うさこちゃんとうま	ディック・ブルーナ	ディック・ブルーナ	石井樵子	1963=1964	福音館書店
12	うさこちゃんとどうぶつえん	ディック・ブルーナ	ディック・ブルーナ	石井樵子	1963=1964	福音館書店
13	王さまと九人のきょうだい	中国の民話	赤羽末吉	君島久子	1969	岩波書店
14	おおかみと七ひきのこやぎ	グリム童話	フレリクス・ホフマン	瀬田貞二	1957=1967	福音館書店
15	おおきな木	シエル・シルヴァスタイン	シエル・シルヴァスタイン	ほんだきいちろう	1964=1976	福音館書店
16	おおきなまがはし	佐藤さとる	村上勲		1971	信成社
17	おおかんのあんでくれたぼうし(『おおかんだいすき』)	スウェーデンのおはなし	太郎助	光吉夏弥	1932=1954	岩波書店
18	おおかんのたんじょうび(『おおかんだいすき』)	アーヴィン・フラック	アーヴィン・フラック	光吉夏弥	1932=1954	岩波書店
19	おしいれのぼうけん	吉田足目	田畑誠一		1974	福音館書店
20	おじさんのかさ	佐野洋子	佐野洋子		1974	福音館書店
21	おしやべりなたまご	寺村謙夫	長瀬太		1972	福音館書店
22	おぼけのパーパバ	アーネット=チゾンとタラス=テラー	アーネット=チゾンとタラス=テラー	山下明生	1971=1972	信成社
23	おぼけリンゴ	ヤノシユ	ヤノシユ	やがわすみこ	1965=1969	福音館書店
24	おふろだいすき	松岡享子	林明子		1982	福音館書店
25	おやすみなさいフランス	ラッセル・ホーバン	ガース・ウィリアムズ	松岡享子	1960=1966	福音館書店
26	かいじゅうたちのいるところ	モーリス・センダック	モーリス・センダック	神宮輝夫	1963=1975	福音館書店
27	かさ	瀬田貞二	太田太人		1975	文研出版
28	かばく	岸田裕子	岸田裕子		1966	福音館書店
29	かばんしややえもん	岸田裕子	岸田裕子		1962	福音館書店
30	きょうはみんなマダマがりだ	エイケル・ローゼン	エイケル・ローゼン	山口文生	1989=1991	福音館書店
31	ぐまのコーデンク	ドン=フリーマン	ドン=フリーマン	松岡享子	1968=1975	信成社
32	ぐりとぐら	なかがわりえこ	おおむらゆりこ		1963=1967	福音館書店
33	ぐりとぐらのえんすく	なかがわりえこ	やまわきゆりこ		1979=1983	福音館書店
34	ぐりとぐらのかいすいよく	なかがわりえこ	やまわきゆりこ		1976=1977	福音館書店
35	くんちゃんのはじめのがっこう	ドロシー・マリノ	ドロシー・マリノ	まさきるりこ	1970=1982	ペンギン社
36	ごあいさつあそび	まわらゆいいち	まわらゆいいち		1988	信成社
37	うさぎまじろのお話	佐々木たづ	三好順也		1970	ポプラ社
38	ごきげんないおん	L・フアデオ	R・デュボアザン	村岡花子	1954=1964	福音館書店
39	ごきぎのくま	E・H・ミナリック	モーリス・センダック	まつおかきょうこ	1957=1972	福音館書店
40	ごすずめのぼうけん	カース・エインズワース	堀内誠一	石井樵子	1978=1977	福音館書店
41	ごねのひつち	ハンス・フィッシャー	ハンス・フィッシャー	石井樵子	1948=1954	福音館書店
42	ごんたあ	林明子	林明子		1989	福音館書店
43	さむらいのサンタ	レイモンド・ブリッグズ	レイモンド・ブリッグズ	菅原政博	1973=1974	福音館書店
44	サリーのこけもつみ	ロバート・マックスキー	ロバート・マックスキー	石井樵子	1948=1986	岩波書店
45	3ひきのくま	バスネツフ	バスネツフ	おがさわらとよき	1961=1962	福音館書店
46	3ひきのやぎのからがらどん	ルウエーの昔話	マーシャ・ブラウン	瀬田貞二	1957=1965	福音館書店
47	じごくのそうべい	田島徳彦	田島徳彦		1978	信成社
48	しずかなおはなし	サムイル・マルシャーク	ウラジミール・レーベデフ	うちだりさこ	?=1963	福音館書店
49	11ひきのねこ	馬場のぼる	馬場のぼる		1967	こぐま社
50	14ひきのあさごはん	いわむらかずお	いわむらかずお		1983	信成社
51	14ひきのおつきみ	いわむらかずお	いわむらかずお		1988	信成社
52	しょうぼうじどうしゃじぶた	渡辺茂男	山本忠敬		1963	福音館書店
53	スーホの白い馬	大塚秀三	山本忠敬		1967	福音館書店
54	ぞうのババ	ジョン・ド・ブリュノフ	ジョン・ド・ブリュノフ	やがわすみこ	1931=1974	福音館書店
55	ぞらいろのたね	中川李枝子	大村百合子		1964=1967=1979	福音館書店
56	ぞらまめくんのベッド	なかやみわ	なかやみわ		1997=1999	福音館書店
57	だいくとおにろく	松居直	赤羽末吉		1962=1967	福音館書店
58	だてだてのおばあさん	さのようこ	さのようこ		1985	フレーベル館
59	たなばた	君島久子再話	初山滋		1963=1977	福音館書店
60	だるまちゃんとてんぐちゃん	加古里子	加古里子		1967	福音館書店
61	ちいさいしょうぼうじどうしゃ	ロイス・レンスキー	ロイス・レンスキー	わたなべしげお	1946=1970	福音館書店
62	ちいさなねこ	石井樵子	堀内誠一		1963=1967	福音館書店
63	ちいさなトッポ	マーシャ=ブラウン	マーシャ=ブラウン	内田莉津子	1963=1984	信成社
64	ぐまとゆうかんせんちやうさん	エドワード・アーディンゾーニ	エドワード・アーディンゾーニ	瀬田貞二	1930=1963	福音館書店
65	くまのぼうや	イブ・スパンク・オルセン	イブ・スパンク・オルセン	やまのうらきよこ	1962=1975	福音館書店
66	ておくら	カウライナ民話	エウケニン・M・ラチョフ	内田莉津子	1951=1965	福音館書店
67	どうぞのいす	香山孝造	植本幸造		1981	ひさかたチャイルド
68	とこちゃんほど	松岡享子	加古里子		1970	福音館書店
69	よりかえっこ	さとうわかこ	二俣英五郎		1978	ポプラ社
70	どろろこぶた	アーノルド・ローベル	アーノルド・ローベル	岸田裕子	1969=1971	文化出版局
71	どろろこハリー	ジョン・ジョン	マーガレット・プロイ・グレアム	渡辺茂男	1956=1964	福音館書店
72	どんでけとんでけおいたい!	梅田俊作/佳子	梅田俊作/佳子		1980	岩波書店
73	おすくんのチョッキ	なかえよしこ	上野紀子		1974	ポプラ社
74	のろまなローラー	小田正吉	山本忠敬		1965	福音館書店
75	ノントンサンタクロースだよ	キヨノサチコ	キヨノサチコ		1978	信成社
76	ノントンおねえさまいよ	キヨノサチコ	キヨノサチコ		1978	信成社
77	ノントンおすまいる	キヨノサチコ	キヨノサチコ		1976	信成社
78	ノントンおとぎのだいすき	キヨノサチコ	キヨノサチコ		1977	信成社
79	ノントンほわほわほわ	キヨノサチコ	キヨノサチコ		1977	信成社
80	はけたよはけたよ	神沢利子	西條孝子		1970	信成社
81	はじめてのおつかい	簡井頼子	林明子		1976=1977	福音館書店
82	はじめてのキャンプ	林明子	林明子		1984	福音館書店
83	はたらきものじよせつしやけいていー	ばーじにあ・リー・ばーとん	ばーじにあ・リー・ばーとん	いしいももこ	1943=1978	福音館書店
84	花き山	吉藤隆介	滝平二郎		1969	岩波書店
85	はなのすきなうし	マンロー・リーフ	ロバート・ローソン	光吉夏弥	1936=1954	岩波書店
86	ババ、お月さまとって!	エリック=カール	エリック=カール	もりひさし	1986=1986=1990	信成社
87	はろろどやわらわのくれよん	クログット・ジョンソン	クログット・ジョンソン	岸田裕子	1955=1972	文化出版局
88	ビーターのいす	エズラ=ジャック=キーツ	エズラ=ジャック=キーツ	木島勉	1967=1969	信成社
89	ビーターのちぶる	エズラ=ジャック=キーツ	エズラ=ジャック=キーツ	きじまはじめ	1964=1974	信成社
90	ビーターウィットのおはなし	ビートルクス・ボター	ビートルクス・ボター	石井樵子	1902=1971	福音館書店
91	100まんびきのねこ	ワタナ・ガダク	ワタナ・ガダク	いしいももこ	1928=1961	福音館書店
92	ふしぎなだけ	松野正子	瀬田貞二		1963=1966	福音館書店
93	ふたりはともだち	アーノルド・ローベル	アーノルド・ローベル	三木卓	1970=1972	文化出版局
94	フランスのいそで	ラッセル・ホーバン	リリアン・ホーバン	まつおかきょうこ	1964=1972	好学校
95	フロプシーのこどもたち	ビートルクス・ボター	ビートルクス・ボター	石井樵子	1909=1971	福音館書店
96	ベレのあたらしいふく	エルサ・ベスコフ	エルサ・ベスコフ	おののけりこ	1970=1976	福音館書店
97	ペンジャミンニールのおはなし	ビートルクス・ボター	ビートルクス・ボター	石井樵子	1904=1971	福音館書店
98	ぼく、お月さまとはなしたよ	フランク・アッシュ	フランク・アッシュ	山口文生	1982=1985	評論社
99	マーシャとおくま	M・プラトフ	E・ラチョフ		?=1963	福音館書店
100	めーちゃんとおひし	フランソワーズ	フランソワーズ	身田一	?=1956	岩波書店
101	めーちゃんおひしおんどん	長谷川根子	長谷川根子		1985=1990	福音館書店
102	ネチネチの木	吉藤隆介	滝平二郎		1971	岩波書店
103	ちもたらう	松居直	赤羽末吉		1965	福音館書店
104	ちりのなか	マリー・ホール・エツツ	マリー・ホール・エツツ	まさきるりこ	1944=1963	福音館書店
105	やまなばのにしき	松谷みよ子	瀬田貞二		1967	ポプラ社
106	ゆきだるま	レイモンド・ブリッグズ	レイモンド・ブリッグズ		1978=1978	評論社
107	ゆきのひ	エズラ=ジャック=キーツ	エズラ=ジャック=キーツ	木島勉	1962=1969	信成社
108	ゆきのひのうさこちゃん	ディック・ブルーナ	ディック・ブルーナ	石井樵子	1963=1964	福音館書店
109	よもぎだんご	さとうわかこ	さとうわかこ		1987=1989	福音館書店
110	ロージーのおきんぼ	バット=ハッチンス	バット=ハッチンス	渡辺茂男	1968=1975	信成社
111	わたしとあそんで	マリー・ホール・エツツ	マリー・ホール・エツツ	身田一	1955=1968	福音館書店

2017年3月6日現在 山下達

これらについて大まかな類型化を行った結果、先行研究には見られないタイプの型が見つかった。それが本稿の副題にある「円環型」のお話である。先行研究で論じられている多くの「行きて帰りし物語」は、ある特定の場所／時間に行き（到達し）その場所／時間から（折り返して）帰ってくる、という構造のみである。例えば『かいじゅうたちのいるところ』では、かいじゅうたちのいる島まで航海して行き、そこからまた同じ道をたどって帰ってくる。『めっきらもっきらどおんどん』では、おばけたちのいる世界まで行き、そこから元の世界に帰ってくる。瀬田も『アンガスとあひる』や「おばあさんとぶた」について論じる中で「話の向きが変わる」（瀬田 1980: 16）と指摘するが、いずれも「行く」から「帰る」に至るまでの間に、話の向き／登場人物の向かう先が変わる、明確な折り返し地点がある。そのような折り返し地点がなく（話の向きが変わらず）、一方向に行き帰ってくるお話の構造をもつ絵本を、本研究では「円環型」絵本と呼ぶこととする⁷。本稿では、以下の「円環型」絵本 4 作品（表 2）を対象に分析を行う⁸。

表 2 「円環型」絵本

書名	詞	絵	訳	出版年	出版社
とりかえっこ	さとうわきこ	二俣英五郎		1978	ポプラ社
とんでけとんでけおきたい！	梅田俊作／佳子	梅田俊作／佳子		1980	岩崎書店
はろるとむらさきのくれよん	クロケット・ジョンソン	クロケット・ジョンソン	岸田衿子	1955＝1972	文化出版局
ロージーのおさんぽ	パット＝ハッチンス	パット＝ハッチンス	渡辺茂男	1968＝1975	偕成社

3 分析

3.1 「円環型」の構造

まずはこの 4 作品が「円環型」の構造をもつことを示すため、以下、それぞれのあらすじを記す。

『とりかえっこ』は、ひよこが母親に「あそびにいつてくるよ ひよ」と言って出発するところから始まる。ひよこは途中さまざまな生きものに会おうが、そのたびに「なきごえとりかえっこしようよ」と言い、鳴き声を交換する。ひよこは他の生きものの鳴きかたをしながら歩いていく。犬と鳴き声を交換したあと猫に襲われ食べられそうになるが、「うーわんわん」と鳴くことによって猫は逃げていく。最後に「む」と鳴く亀と鳴き声を交換し、そのまま「む」と鳴きながら帰ると母親に「おやまあ」と驚かれる。

『とんでけとんでけおきたい！』は、転んだみえちゃんが「えーん、えーん、いたいよー」と泣いているところから始まる。おかあさんが「いたいいたいのーおにいちゃんへとんでいけー、ほいっ！」と「いたい」を投げると、おにいちゃんに「いたい」がとんでくる。この「いたい」は次から次へと飛んでいき、おかあさんに戻ってくる。最後におかあさんは「いたい」に砂糖を入れてこねて丸めて食べてしまう。

『はろるとむらさきのくれよん』は、大きな紫のクレヨンを使っていた子どものはろどが、月夜の散歩をするところから始まる。月と散歩する道をクレヨンで描き、進んでいく。散歩をしながら、次から次へといろいろなものを描き足していく。りんごの木、その番をするドラゴン、ドラゴンが怖くて震える手で描かれた海...等、描くことによって散歩／お話が進んでいく。最後には眠くなったはろどが、自分の家の窓とベッドを描いてその中に入って眠る。

『ロージーのおさんぽ』は、めんどりのロージーが散歩に出かけるところから始まる。文（詞）にはロージーの散歩の様子しか書かれないが、絵ではロージーを食べてしまおうと虎視眈々と狙うきつねが描かれる。しかしきつねの試みは、自ら踏んだ鍬の柄にぶつかったり池に落ちたりと、いつも失敗する。ロージーはマイペースに散歩を続け、最後に蜂の巣箱の下を歩いていく。きつねはその巣箱にぶつかってしまい、蜂に襲われ山を逃げていく。ロージーはそのまま自分の家に帰る。

4 作品とも、目的地も折り返し地点もない。これは、多くの「行きて帰りし物語」に目的地や到着地が

描かれ、その特定の場所から帰ってくるという構造を持つのと対照的である。例えば『ぐりとぐら』では、森の奥まで行ってカステラを作って帰ってくる。『ももたろう』では、鬼が島まで行って鬼を退治して帰ってくる。いずれも森や鬼が島が目的地や到着地として描かれ、そこから引き返して戻ってくる、という構造になっている。それに対して上記4作品は、一方向に歩いて／飛んでいき、方向転換をせずにそのまま帰って／戻ってくる、という特徴を持つ。「行く」過程と「帰る」過程が明確に分かれておらず、読者には、ぐるっとまわって戻ってくる、という印象を与える。これが「円環型」の構造である。

3.2 くりかえしとリズム

「円環型」絵本は一方向に進むだけでなく、いずれもくりかえしの技法が用いられている。『とりかえっこ』では、ひよこが他の生きものに会うたび「ねえ 〇〇さん なきごえ とりかえっこ しょうよ」「ぴよ」「ちゅう」などと言い、とりかえっこした鳴き声で鳴きながら歩いていく。これが何度もくりかえされる(図1.2)。



図1

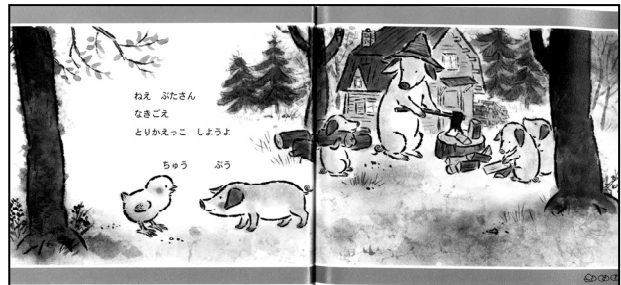


図2

『とんでけとんでけおいたい!』では、「〇〇の いたい いたいの ××へ とんでいけー、ほいっ!」と「いたい」を飛ばすことがくりかえされる(図3.4)。

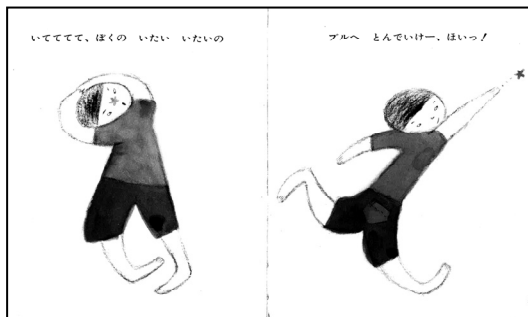


図3

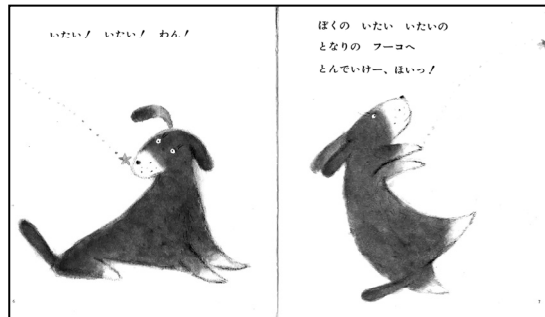


図4

『はろるとむらさきのくれよん』では、はろるとは迷子にならないよう木を描き、海に沈んでしまったからボートを描き、おなかがすいたからお弁当のパイを描き...というふうに、困ったことが生じてそこに描き加えることで難を乗り切っていく、という場面がくりかえされる(図5.6.7)。

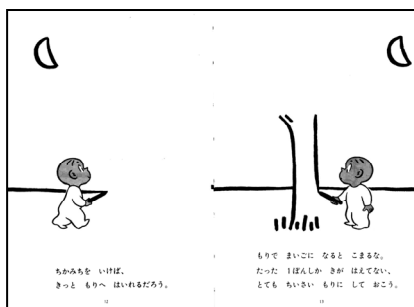


図5

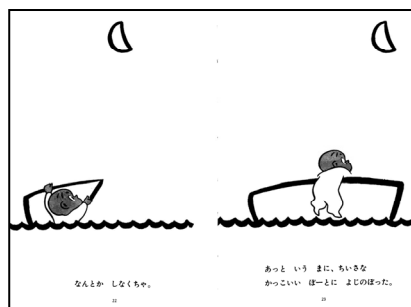


図6

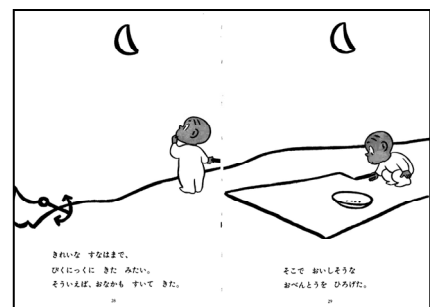


図7

『ロージーのおさんぽ』では、ロージーが散歩をする様子が描かれた後にロージーを狙うきつねの失敗が描かれる、という場面がくりかえされる（図 8.9.10.11）。

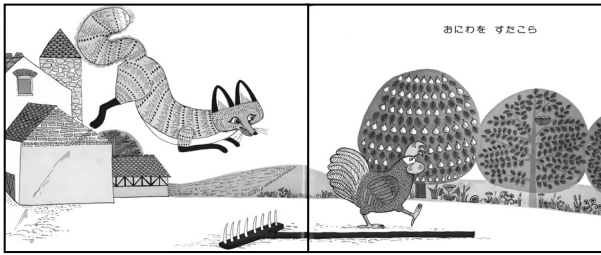


図 8

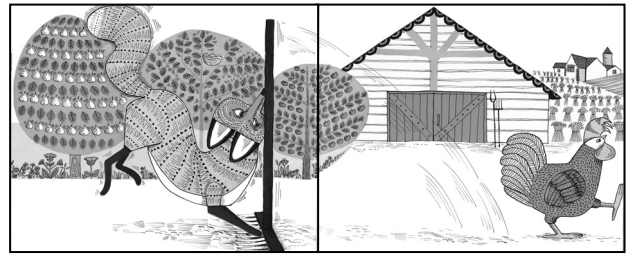


図 9

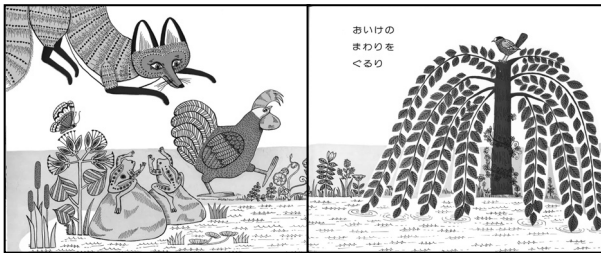


図 10



図 11

以上のように、いずれも明確にくりかえしの技法が用いられることにより、ページを繰るごとに一定のリズムが生まれている。同じ文（詞）がくりかえされることによって、さらにリズムが生まれているのが『とりかえっこ』『とんでけとんでけおおいたい！』の2作品である。『とりかえっこ』では、「ねえ ねずみさん なきごえ とりかえっこしようよ」「ぴよ」「ちゅう」／「ぴよぴよ」「ちゅうちゅう」／「ねえ ぶたさん なきごえ とりかえっこしようよ」「ちゅう」「ぶう」／「ちゅうちゅう」「ぶうぶう」／というように、ひよこのせりふと鳴き声がくりかえされ、とりわけ鳴き声のところはリズムカルに読める。『とんでけとんでけおおいたい！』も同様である。「いたいいたいのー ××へとんでいけー」ということばはわらべ歌のようなこちよいリズムを持っている。『はろるとむらさきのくれよん』と『ロージーのおさんぽ』では、それぞれの訳者がことばのリズムを大切に翻訳しているため、やはり地の文（詞）が耳にこちよい。『はろるとむらさきのくれよん』では、例えば「おや、つきがでて いない。」「つきよの さんぽなのに つきが でて ないなんて。」「それに さんぽする みちも なくっちゃ。」のように、一文が非常に短く、テンポよく読み進められる。『ロージーのおさんぽ』も一文が短いうえ、「おにわを すたこら」「おいけの まわりを ぐるり」「こなひきごやの まえを すたすた」のように響きのよい擬態語が用いられている。いずれも文（詞）自体のくりかえしはないが、どれもリズムカルである。

3.3 起承転結

3.2 でみてきたように「円環型」絵本にはくりかえしの技法が用いられているが、単に同じ事象がくりかえされるだけでなく、いずれも起承転結が明確になっている（表 3）。瀬田（1980）は次のように述べる。

もし「行って帰る」という方式を貫くとしたら、一つ一つの出来事をただ単純に出したりひっこめたりというのではいけない。それじゃ、お話が盛り上がってこない。そうじゃなくて、一つ何かをつけ加えることによって、お話がふとってゆくとか、進展していくとか、とにかく矢印的な進み方でつけ加えていかなきゃだめだと思います。

（瀬田 1980：31）

瀬田のことばを借りれば、4作品とも「何かをつけ加える」ことをこの起承転結の展開、とりわけ「転」の部分によって行っていると考えられる。

表3 「円環型」絵本の起承転結

	起	承	転	結
とりかえっこ	ひよこ「あそびにいつてくるよ ぴよ」 →遊びに出かける。	ひよこはねずみや豚、蛙、犬と鳴き声を交換しながら歩き続ける。	猫に襲われ食べられそうになるが、犬と鳴き声を交換していたおかげで追い払うことができる。	ひよこは「む」と鳴く亀と鳴き声を交換して、家にたどり着く。母親に「おやまあ」と驚かれる。
とんでけとんでけおおいいたい！	みえちゃん「えーん えーん、いたいよー」 おかあさん「いたい いたいの一おにいちゃんへ とんでいけー、ほいっ！」 →「いたい」を飛ばす。	おにいちゃん、犬のブル、猫のフーコ、うさぎのピョン、鶏のこっこおばさんに、次から次へと「いたい」が飛んでいく。	こっこおばさんは「あなのなかへきえてしまえ」と「いたい」を飛ばすが穴には蟻がいて、蟻はどこかに「いたい」を飛ばす。それがぐるぐる回る。	「いたい」がおかあさんに戻ってくる。おかあさんは「いたい」に砂糖を入れて丸めて食べてしまう。
はろるとむらさきのくれよん	「あるばん、はろるとは ふっと つきよの さんぽが したくなった。」 →散歩に出かける。	はろるとはむらさきのくれよんで絵を描きながら散歩を続ける。	眠くなって自分の家を探し始める。山を描いて部屋を探すそこから落ちてしまい、気球を描いて助かる。家を探し続ける。	家の窓とベッドを描いて眠る。クレヨンが床に落ち、はろるとも夢の中に落ちていく。
ロージーのおさんぽ	「めんどりの ロージーが おさんぽにおでかけ。」 →散歩に出かける。	ロージーはマイペースに散歩を続ける。きつねはロージーに何度も襲いかかるが、その都度失敗する。	ロージーが蜂の巣箱の下を歩くと、誤って手押し車に乗ったきつねが蜂の巣箱に激突する。きつねは蜂に追われ逃げていく。	ロージーは無事に家に着き、「やれやれ ばんごはんに まにあった。」と言。

『とりかえっこ』では、単に鳴き声をとりかえるだけでなく、猫に襲われそうになったときにちょうど直前に交換していた犬の鳴き声によって難を逃れることができる。ここにこの作品のおもしろみがある。『とんでけとんでけおおいいたい！』では、単に毎回誰かに「いたい」を飛ばすのではなく、穴の中に飛ばすという工夫がされている。読者に見えない穴の中には実は蟻がいて、また「いたい」がぐるぐる飛ばされていく...という展開に、話のふくらみがある。『はろるとむらさきのくれよん』では、ただひたすらクレヨンでお絵描きしながら散歩するのではなく、「眠くなって自分の家を探す」という目的が加わることでより話にしっかりとした筋ができ、散歩もお話も終わるという結論に向かう話の流れがわかりやすい。『ロージーのおさんぽ』でも同様に、きつねが蜂に追われて逃げていくという展開が入ることでもおもしろみが加わり、さらにロージーが何事もなく帰宅するという結論への話の流れがまとまっている。

3.4 モチーフ

「円環型」絵本のモチーフにも特徴がある。『とりかえっこ』『はろるとむらさきのくれよん』『ロージーのおさんぽ』のいずれも、登場人物は散歩に出かける（『とりかえっこ』では「あそびにいつてくる」ということばで表現されるが、実際には散歩している）。いずれもその先に何かしらの目的があって出かけるわけではなく、散歩それ自体を楽しんでいる。『とんでけとんでけおおいいたい！』に至っては、ひと／動物が行って帰るわけではなく、「いたい」を表す赤い星マークのようなものが行って帰ってくる。当然、そこには意図や目的は見いだせない。この無目的性に関しては3.1でも触れたが、他の「行きて帰りし物語」絵本と比較するとよりわかりやすい。例えば『アンガスとあひる』では、アンガスが生垣の向

こう側の声の主の正体を知るため（目的）に生垣を越えて行く。『ももたろう』では、鬼退治をするため（目的）に鬼が島へ行く。いずれの行為も目的を伴っている。それに対し「円環型」絵本では、散歩や遊び、飛ぶという行為そのものが楽しみであり、何らかの目的を伴う行為ではない。

無目的性に加え、これらのモチーフが子どもにとって身近なものであることも指摘できる。散歩や遊び、「いたいいたいのとんでいけ」は、子どもたちにとって非常に身近なものである。絵本に登場する動物やクレヨンなどのものについても同様である。

4 考察

3節の分析を通して「円環型」絵本の特徴が明らかになった。折り返しがなく、ぐるっとまわって行って帰る構造であること、くりかえしとリズムがあること、起承転結の構成がしっかりしていること、モチーフがすべて無目的性を具え子どもにとって身近なものであること、の4つである⁹。本節ではこれらの特徴をふまえて、なぜ子どもは「行きて帰りし物語」を好むか考察したい。

4.1 子どもの遊び

長年保育現場で子どもとかかわってきた今井（1992）は、子どもの「行って帰る行為」や遊びについて興味深い指摘をしている。それは、当初、始めと終わりの確認をするだけの行為、つまり目的のない確認行為をくりかえしていた子どもが、それをくりかえしているうちに、次第に目的をもって行動するようになる、ということである。少し長くなるが、以下に引用する。

生活の流れの中に、始めと終わりがあることに気づきだした子どもたちは、その始めと終わりを確認することが彼らの遊びになるようです。〔中略〕

散歩に出かける時、一、二歳児クラスの子どもたちは、当初うれしくて玄関にとび出していったのですが、数か月たつと玄関脇の事務所に居られる園長先生にも「行ってきまーちゅ」と挨拶しなくては気がすまないといったように靴をもって事務室に入っていきそれから出発するようになりました。自分がこれから出かけるのだという確認のための行為のようです。

帰りも、もちろん同じです。「たーまー」（ただいま）「かえりー」（園長先生が言ってくれることばをそのままおぼえて）と誰かに帰ってきたことを表さないと二階の自分たちの部屋にさがってくれないのです。

この時期の子どもたちの始まりの時と、終わりの時の確認は、自分たちの行為にひとまとまりの杭を打ちこんでいくような意味があることなのだと思います。〔中略〕

始めと終わりの確認を行為によって繰り返し楽しむうちにやがて、出かけることに意味をもつようになります。〔中略〕

手さげ袋を下げて廊下にとび出していったともこ（二歳）は、戸口の所でくるっと私の方に振り返り「豆腐、買ってくるね」と念を押すのでした。

これまで「行ってきまーす」だけだったお出かけ遊びを繰り返し楽しむうちに「何をしに行くのか？」といった自分なりのめあてをことばで表現し出かけるようになりました。行為の繰り返しが、めあて（見通し）を生むようになるのでしょうか。〔中略〕

この繰り返し行動は、子どもにとって自分のめあてを遂行するための必要欠くべからざるプロセスなのではないかと思います。自分のイメージにそって同じ行為を何度か繰り返すうちに、彼らの中に行動を見通す力が生じてくるのではないのでしょうか。

（今井 1992：83-88 〔中略〕は筆者による）

筆者も数年 0-2 歳児とかかわってきたが、今井の言うような「行って帰る」行為／遊びをする子どもの姿に何度も出会った。その姿と「円環型」絵本を比べると、共通点が浮かび上がってくる。それは、ただひたすら「行って帰る」という無目的な行為／「行って帰る」という動きそのものが、何度もくりかえされていることである。「円環型」絵本の無目的性とくりかえしは、まだ目的やめあて／見通しをもつ前の段階の子どもの遊びの構造に、非常によく似ているのである。

4.2 子どもの身体性

小さな子どもの遊びの構造と「円環型」絵本の構造が似ていることを指摘したが、さらにそこから子どもの身体性について考えたい。両者の構造が似ているということは、「円環型」絵本は読者としての子どもにとって、とりわけまだ言葉をもたない子どもにとって、身体感覚的に受け入れやすいなじみのあるものだと考えられる。すでに「円環型」絵本のもつくりかえしやリズムが子どもにとってこちよいものであることは 3.2 で指摘した。また起承転結という構成が話に緩急とまとまりをうみ、それがたのしさを生み出していることも 3.3 で指摘した。「円環型」絵本は、話の内容よりもまず先に、構成や構造そのものの、話のもつリズムそのものが、小さな子どもの身体になじむものなのだと言えよう。これが、子どもが「円環型」の「行きて帰りし物語」を好む理由のひとつと考えられる。

さらに円環構造が子どもの遊びにとって重要であることは、長年保育環境を研究し実際に建築にも携わる仙田によって指摘されている。仙田（1992）は、子どもが群れて遊ぶのに必要な空間を「遊環構造」と呼び、その条件として「循環機能があること」を挙げている。「円環型」絵本のもつ、ぐるっとまわって行って帰ってくるというイメージは、この循環機能をもつ子どもの遊び場のイメージとも重なる。やはり子どもの遊びや身体感覚になじみのある構造であると言えよう。

5 まとめ

本稿を通して、「円環型」の「行きて帰りし物語」絵本は子どもの身体性になじみのある構造を持っていることが明らかとなった。冒頭の瀬田の仮説を支持する結果である。

先行研究では、目的や行き先をもって「行って帰る」型の「行きて帰りし物語」について論じられていたため、その内容の分析から「私探し」や「（精神的）成長」「自己感確立」「欠如の解消」などの「行きて帰りし物語」のもつ意味が導き出されていた。本稿は「円環型」という話の構造に着眼して分析・考察を行ったため、子どもの身体性という結論に至った。今後は、目的や行き先をもって「行って帰る」型の「行きて帰りし物語」絵本についても詳細に検討し、子どもにとって「行きて帰りし物語」がどのような意味をもつのか、なぜ子どもが「行きて帰りし物語」を好むのか、様々な側面から明らかにしたい。

注

¹ 瀬田（1980）は、J.R.R. トールキン（1937）『ホビットの冒険（*The Hobbit*）』の副題“or There and Back Again”から「行きて帰りし物語」という語を用いている（瀬田 1980: 6）。先行研究等でも瀬田の表現を借りて、登場人物が「行って帰る」物語を「行きて帰りし物語」と表しており、この語はひとつの名詞として一般化している（しつつある）と考えられる。本稿でも、この「行って帰る」構造をもつ絵本を「行きて帰りし物語」絵本と表現することとする。

² 生駒は其中で（2）についてのみ論じる。

³ 「ミリオンブック」には通常版の『はらぺこあおむし』とボードブック版の『ボードブック はらぺこあおむし』が挙がっていた。中身は同じであるため、1冊と数えた。

⁴ 「お薦め絵本」には通し番号が振られており、最後の1冊は207となっている。しかし、132から150まで番号が飛んでおり、正確には207冊ではなく190冊であった。またこのリストには「絵本」というより「童話」と呼ぶべき作品も含まれている（例えば『いやいやえん』『ふたりはともだち』等）。リストに含まれていることから、未就学の子どもたちもこれらの童話に触れる可能性が高いと考えられるため、本研究の分析対象に含めた。なおいずれも1冊に数話が含まれている。中には「行きて帰りし物語」に分類されないお話も含まれていたが、ここでは冊数を示すため1冊と数えた。『おかあさんだいすき』は、お話ごとに作者が異なるため、それぞれ別個に表記した。

⁵ 分析・考察の途中である現段階で、111冊となっている。今後さらに細かく分析を進めていく中で、この分類（冊数）は変わる可能性もある。

⁶ 表は書名の「あいうえお」順に並べている。出版年の「○=×」について、○は原著の出版年、×は翻訳されたものの（日本での）出版年を表す。同じく出版年の「○→×」について、○は初版の出版年、×は改訂版の出版年を表す。特に福音館書店の「こどものとも」シリーズは、当初「こどものとも」の雑誌版だったものが後に「こどものとも傑作集」として単行本化されている。その場合、○は「こどものとも」出版年を、×は「こどものとも傑作集」出版年を表している。なお表1では、本稿で論じる「円環型」絵本4冊に網掛けをしている。

⁷ 「円環型」という語について、中川（2011）も参照した。中川は絵本の表現構造をまとめる中で「円環構造」について論じる。「円環構造とは、時空間を前に向いて進むので、線構造の一種とも考えられるが、先述の単一線往復構造のように折り返して戻るのではなく、円環を形作りながら進む絵本である。特に起点をこえて進む絵本は、終わりというものがなく、動きが永遠に続いていくので螺旋構造ともいえ、時空間を区切りそこで完結する線構造とは本質的に異なる」（中川 2011: 377）。本稿で論じる絵本も大塚（2008）が指摘するように、登場人物は行って帰った後、「元の状態からは変化している」（大塚 2008: 38）と考えられるため、元の場所より少し違う（成長した）場所に戻っていると言え、その意味では「螺旋型」とも呼ぶべき構造をもつ。さしあたり本稿では、中川が構造名として使用した「円環構造」に倣い、「円環型」という語を用いることとした。

⁸ 瀬田が「大食いのねこ」系／『てぶくろ』の話と呼ぶ型のお話も、向きが変わる明確な折り返し地点をもつ「行きて帰りし物語」とは異なるタイプであり、本研究で選定した絵本の中にも含まれていた。それらの作品については紙幅の都合上、別稿で論じたい。

⁹ 起承転結が明確であること、モチーフが子どもにとって身近であることは、他の多くの「行きて帰りし物語」絵本にも共通しているため「円環型」絵本独自の特徴とは言えない。しかしこれらの点は以下の考察（子どもの身体性）に関わってくるため、本稿でも確認しておく。

引用文献

- 藤本朝巳, 2015, 『子どもと絵本——絵本のしくみと楽しみ方』人文書院。
- 古相正美・森田真紀子, 2006, 「良い絵本試論」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』38: 99-109。
- 生駒幸子, 2008, 「絵本の物語構造に関する研究——“行きて帰りし”物語と子どもの絵本体験」『絵本学』10: 15-28。
- 今井和子, 1992, 『なぜごっこ遊び?——子どもの自己世界のめばえとイメージの育ち』フレーベル館。
- 川越ゆり, 2007, 「子どもと「行きて帰りし型」——絵本と「秘密基地」回想録の分析を通して」『山形短期大学教育研究』7: 43-52。
- 宮本淳子, 2013, 「回想を含む絵本の特徴——時空的「行って帰る」物語の観点から」『常葉国文』34: 1-23。
- 中川素子, 2011, 「絵本の表現構造」中川素子・吉田新一・石井光恵・佐藤博一編『絵本の事典』朝倉書店, 370-381。
- 大塚英志, 2008, 『ストーリーメーカー——創作のための物語論』アスキー・メディアワークス。
- 斎藤次郎, 2006, 『行きて帰りし物語——キーワードで解く絵本・児童文学』日本エディタースクール出版部。
- 仙田満, 1992, 『子どもとあそび——環境建築家の眼』岩波書店。
- 瀬田貞二, 1980, 『幼い子の文学』中央公論新社。
- トーハン, 2015, 『ミリオンぶっく 2015年版』トーハン。